郷土財としてのネコギギ保全

「郷土財」とは、「かけがえのない郷土への思いがもてる事物事象」を表す言葉で、
その地域の特性や、地域の人がワクワクし、守っていきたいと思えるものを指します。
今回は、ネコギギ保全に取り組む行政と研究者、地域の姿を紹介します。

ふるさとの川へ放流したネコギギから産まれた稚魚

ネコギギとは

ネコギギは、東海３県の川の中上流域にのみ生息する日本固有の淡水魚。ナマズの仲間であり、４対の口ひげが特徴的です。成魚は体長 10cm ほどです。1977 年に天然記念物に指定され、今では生息地の激減により、環境省の絶滅危惧種に選定されています。

行政 ネコギギを守る市の取り組み

— interview —

自然学習室　室長
後藤 健宏

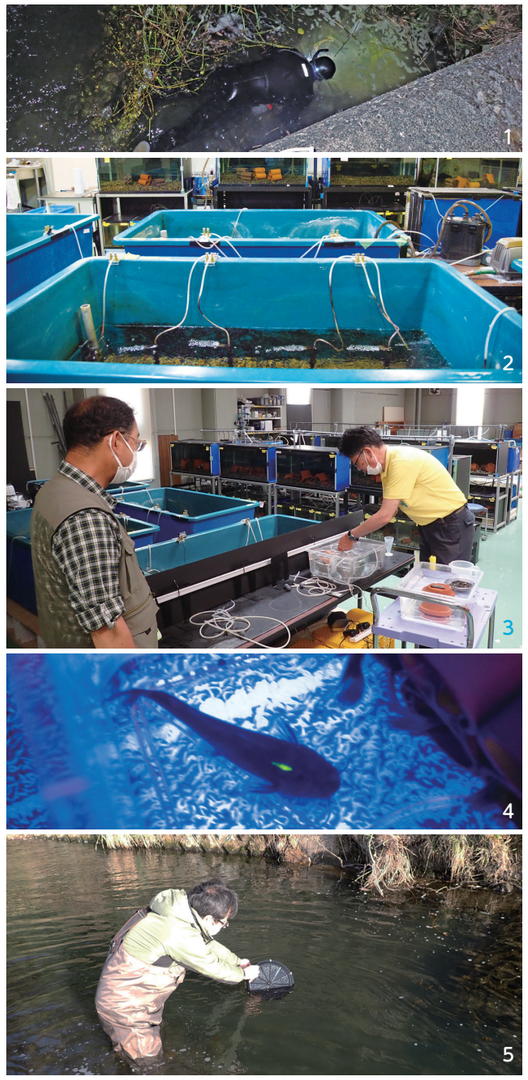
市が繁殖させ、ふるさとの川に放流

市を流れる員弁川水系は魚類の豊富な河川として知られており、過去にはたくさんのネコギギが生息していました。しかし、台風の影響などで、その数は激減しました。このまま放置すれば近い将来には絶滅するとの判断から、三重県教育委員会がネコギギ保護を開始。その後、市教育委員会が保護事業を引き継ぎました。

当初は、川でわずかに残っていたネコギギを保護し、それらを親個体として家系の管理をしながら、室内繁殖を始めました。今では毎年、稚魚が産まれるようになり、日本魚類学会の「放流ガイドライン」に基づいて、ふるさとの川へ放流しています。その結果、環境改善した場所に放流したネコギギがそのまま居つき、川で繁殖していることを確認しています。

自然繁殖の成功で終わるのではなく、今もなお大学などの研究者を中心としたネコギギ保護増殖事業指導委員会の指導を受けながら事業を進め、啓発活動も継続して取り組んでいます。

1. 川の調査 2. ネコギギの飼育水槽 3. 水槽で産まれた卵の世話 4. 放流予定のネコギギ。ブラックライトに反応するマーキングの色や位置を変えることで個体を識別 5. 放流の様子



— interview —

里中 知之さん
▶志摩マリンランドでのネコギギの繁殖経験を生かし、2022 年から市の地域活性化起業人として勤務。

繁殖数を維持していくために

私は、志摩マリンランドに在籍していた 2003 年から、いなべ市と協力して員弁川水系のネコギギの繁殖に携わってきました。水族館でも、繁殖は苦戦するものですが、いなべ市はそれを 2013 年に単独で成功させていました。当時から、この実績はすごいことだと感じていました。

ネコギギの繁殖の難しさは、何と言っても家系の管理です。近親交配を続けると、繁殖数が減ってしまうので、家系図を作成し、大学などの専門機関からアドバイスをもらいながら年間の計画を立てています。また、飼育されている個体は、世代が進むごとに繁殖数が減っていくことも悩みの種。現在は、放流したネコギギが川で繁殖していることが分かっているので、繁殖能力の高い野生の個体を取り入れ、長期的に繁殖数を増やしていくことが望ましいです。

いなべ市は、水槽内での産卵を促すため、レイアウトを工夫することで、従来のホルモン剤を使った人工繁殖に頼らずに、水槽内での自然繁殖を成功させました。今後は、そうしたノウハウの上に、より効率的な繁殖方法をマニュアル化することで、担当者が変わっても事業を継続できるような仕組みを作っていきたいです。

ネコギギ保全の父

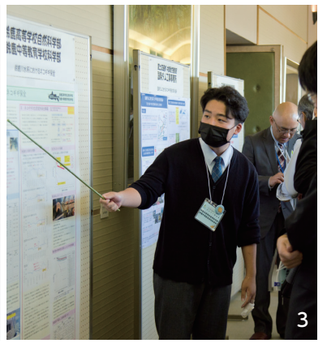
清水 義孝さん
（北勢町東村）

ネコギギをはじめとする淡水魚の研究者。魚類自然史研究会に所属。現地の川の状況や、そこに住む生物全般に精通しており、現在のネコギギ保全事業につながる基礎を作りました。国土交通省の依頼で、設楽ダム建設に伴う環境保全に携わり、飼育繁殖個体の河川での自然繁殖を成功させ、論理的方向性を文書で示しました。
このほか、専門紙へ報告書を掲載するなど、高い専門性を生かして、保全活動に取り組む人たちにアドバイスを与えています。

研究者

シンポジウムで聞く研究者たちの声

昨年６月、市のネコギギ保全の取り組みが、「日本水大賞」の環境大臣賞を受賞しました。これを記念して、10 月 29 日（日）に開催された「ネコギギ保全シンポジウム」では、保全活動の研究者に講演をいただきました。（後援：文化庁、三重県、三重県教育委員会）



1. 約 200 人が藤原文化センターの市民ホールに集まりました 2. 会場前に設置された看板 3.4. 会場ロビーでは、ネコギギの保全に関わる学校、水族館や国・県の関係機関などによるポスター発表が行われました

lecture

京都大学　准教授
渡辺 勝敏さん

「奇跡の家系の末裔（えい）」と生きていること

今、生物多様性の保全が、人間の幸福の増進にもつながることが分かり、世界的に取り組みが進められています。地球に生命が誕生してから、さまざまな種が生まれ、派生し、絶滅を繰り返してきました。ほとんどの生物が、子を残せず絶えていく中で、次世代へと命をつないできた「奇跡の家系の末裔」が集まって生きているのがこの世界です。普段はなかなか考えつかないことですが、ネコギギの保全を通じて、その本質に気づき、考えを深めるきっかけにしてもらいたいです。

現在、河川の汚染や地球温暖化などの影響により、ネコギギを含むさまざまな生物が絶滅の危機に瀕（ひん）しています。これは、私たち人間が、自分たちの暮らしを良くしていく過程で起きている問題です。豊かな自然環境と私たちの便利な暮らし。そのどちらかを犠牲にするのではなく、法や制度、技術を発展させることで、その両立を目指すことが大切です。

ネコギギは、その地で長らく生き抜いてきた清流のシンボルとも言える魚。その復活に向けての取り組みは、自然あるいは生物豊かな川の再生にもつながる価値ある挑戦だと考えます。

lecture

文化庁　文化財調査官
江戸 謙顕さん

天然記念物制度を通じた保護意識

ネコギギなどの天然記念物を保護するための法律として、文化財保護法というものがあります。これは、「大事なもの、貴重なものを守りたい」という日本人の気持ちをルール化したものです。天然記念物制度は、単に個体数の少なさではなく、学術的な価値があるかどうかで決定されており、100 年以上にわたって国内の多様な自然を保護してきました。

また、この制度は、地域の自然文化の促進や、自然と人との適切な関係づくりにも貢献しています。いなべ市では、行政や専門機関だけでなく、学校や地域などのさまざまな人が、ネコギギの保全に取り組んでいます。まさに、ネコギギを「大事なもの」として保護する意識が醸成されていることがうかがえます。

いなべ市のこうした姿勢や保全活動がなければ、員弁川水系のネコギギは絶滅していたと言えるでしょう。今はまだ、人が手を加えないと個体数が維持できない危険な状況ではあるため、引き続き保全に取り組んでいくことが大切です。

lecture

名古屋大学　減災連携研究センター
田代 喬さん

自然と共生する川づくりを

約 20 年前に実施した調査により、ネコギギはまっすぐな川ではなく、蛇行した川に多く生息していることが分かりました。流速はおだやかで、川底の石は大きいなど、河川工学の観点からも特徴があります。

現在、河川整備を行う際には「多自然川づくり」が求められています。これは、川が本来有する生物や自然を保全し、地域の暮らしや歴史と共生しながら整備していく取り組みです。

しかしその一方で、近年、日本各地で大水害が多発しており、河川管理で治水の安全度を高めることも求められています。このような状況にあって、川の蛇行した部分をまっすぐにし、川底を掘り下げるという、ある意味で安易な方法が採用されることが多いと感じます。

今必要なのは、河川整備の技術向上に加えて、地域の関心や監視の目を川に向けてもらうことだと考えます。こうした取り組みを続けることによって、郷土の宝を残しながら安全な川を作るという好循環が生まれるのではないでしょうか。

＼ちょっと一息／

どうして「ネコギギ」と名付けられたの？

かつてはギギモドキと呼ばれていましたが、同名の魚が朝鮮半島にいたため、ネコギギと改名されました。「ネコ」の由来については諸説ありますが、韓国に生息する近縁種「ウサギギギ」が、丸くてかわいい見た目から名付けられたことと同じく、かわいいつながりで名付けられたとも言われています。

地域 子どもたち自体も郷土財

2006年からネコギギについて学んでいる十社小学校。昨年、「野生生物保護功労者表彰」の環境省自然環境局長賞を受賞した同校の取り組みについて紹介します。

十社小学校の保全活動

安田 愛結さん　吉金 正志郎さん　田中 絢人さん

安田さん：「ネコギギを大切に思う気持ちが伝えられてうれしかったです」
吉金さん：「聞いている人たちが楽しんでくれてうれしかったです」
田中さん：「とても緊張したけれど、ハッキリと話せてよかったです」

学習発表「ネコギギが住みやすい川へ」

ネコギギ保全シンポジウムで、十社小学校の５年生が学習発表会を行いました。スクリーンを使ってネコギギの生態に関するクイズを出題するなど工夫し、集まった約200人の来場者を楽しませました。

昨年の主な取り組み

川の生物調べ

５年生から本格的なネコギギ学習が始まり、実際に川を訪れ、生き物探しやネコギギが好む環境を観察します。

身体測定や水槽の移し替え

子どもたちが、ネコギギの重さや大きさを計測し、成長具合を記録します。水槽の移し替えのときは、放流する個体との仕分けも手伝います。

全校児童や保護者や地域への学習会

市の職員が講師を務め、全校児童に向けたネコギギ学習会を実施。家庭内でも理解を深めてもらおうと、保護者や地域に向けた学習会も行っています。

interview

十社小学校　教諭
林 さゆみさん

自然を大切に思う子どもたち

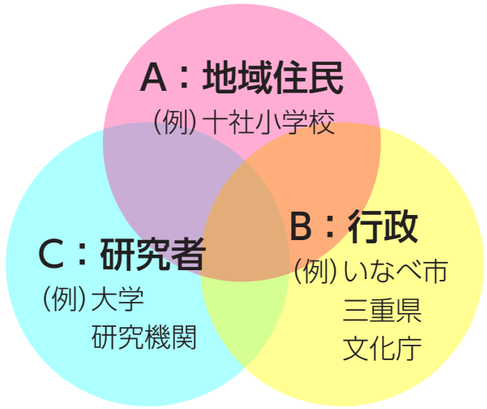
十社小学校にとって、ネコギギはとても身近なものです。学校の玄関に置かれた水槽にはネコギギが泳いでおり、子どもたちが毎日姿を眺めています。また、５年生からは本格的なネコギギの学習が始まったり、「ネコギギ会」という名称の児童会があったり、学校生活とネコギギには強い結びつきがあります。

私が初めてここに来たときは、子どもたちが自然に対して強い親しみを持っていることに感動しました。１年生のころから、ネコギギを含む生き物全般と身近な環境にいるので、自然やふるさとの姿を大切にしたいという思いがあふれているんだろうなと感じています。

lecture

岐阜協立大学　地域創生研究所
森 誠一さん

▼環境保全の三位一体



保全活動を文化に昇華する

郷土財を守っていくためには、地域住民、行政、研究者という３つの主体が必要です。地域住民は地域での活動を、行政は法や規範を、研究者は科学的な根拠を担います。これを、「環境保全の三位一体」と表現し、それぞれの重なる範囲が大きければ大きいほどに、保全の効果は高まります。この三者が交流できる仕組みさえできていれば、保全活動はおのずと継続されていくでしょう。

郷土財とは、いわば地域の宝物です。地域の特性を表すものであって、必ずしも天然記念物である必要はありません。その意味で、いなべ市の郷土財は、ネコギギやその住みかだけでなく、その保全に取り組む子どもたちも含んでいると言えます。

郷土財をまちづくりの一つの指針とし、ネコギギの保全活動を、「文化に昇華」していくことが望ましいです。

「私たちが学んだことを、必ず次の５年生に引き継ぎ、みんなでいなべ市の自然を守っていきます」
シンポジウムの最後に、子どもたちが伝えたメッセージです。
郷土の自然を次の世代に残していけるよう、三位一体となって保全活動を継続していく――
そのきっかけが、ネコギギの保全にはあるのではないでしょうか。